

## ■ 市長から市民のみなさんへ

市長 白井 博文



### ■ 人口の動態について

本市の人口は、合併直後の平成 17 年 3 月末が 6 万 8,170 人でしたが、少しずつ減って、5 年後の平成 22 年 3 月末には 1,728 人減の 6 万 6,442 人となりました。毎年、約 345 人ずつ減っている計算になります。

しかし、12 ある小学校区別に見ると、一様に減少しているのではなく、地域差があることが分かりました。5 年間で高千帆校区は 284 人、厚狭校区は 103 人増え、高泊校区も 12 人増えています。残りの 9 校区は減っていますが、その程度は様々で、須恵校区が 506 人減でトップ、次いで埴生校区が 379 人減、有帆校区が 339 人減と続いています。

ところが世帯数で見ると、合併直後の平成 17 年 3 月末が 2 万 7,215 世帯でしたが、毎年少しずつ増えて、5 年後の平成 22 年 3 月末には 960 世帯増の 2 万 8,175 世帯となりました。毎年、192 世帯ずつ増えている計算になります。

ついでに税務課で、この 5 年間の新築住宅戸数を調べてみると、木造、非木造を合わせて、専用住宅が 1,002 戸、共同住宅(アパート)が 129 棟新築されていて、毎年、専用住宅が約 200 戸、共同住宅が約 26 棟増えていることが分かりました。

以上をまとめると、本市の人口は、合併後の 5 年間で、毎年約 345 人ずつ減っていますが、世帯数は逆に、毎年 192 世帯ずつ増えており、新築住宅戸数も、毎年、専用住宅が約 200 戸、共同住宅が 26 棟増えていることになります。

これらの数字の関連性を探るため、この 5 年間の出生者数と死亡者数を調べてみました。その結果、赤ちゃんは毎年約 500 人前後が生まれてきます。(その推移は 507 人, 507 人, 554 人, 501 人, 499 人。赤ちゃん誕生という「天からの贈り物」に、何か法則のようなものを感じませんか。)一方、毎年約 700 人前後の方が亡くなられていて(701 人, 635 人, 762 人, 768 人, 713 人)、その差は 1 年に約 202 人、5 年間で 1,011 人であることが分かりました。

毎年減少する人口は約 345 人。そのうち約 202 人は自然減。その差約 143 人が転出者と転入者の差ということになります。そして、毎年かなりの数の住宅(専用住宅が約 200 戸、共同住宅が約 26 棟)が新築されており、それには世帯分離からくるものが含まれるにせよ、他市から所帯持ちの転入がかなりあることも窺うことができます。そうであれば、本市の人口減を食い止めるには、進学等の理由による若者の転出はやむを得ないとしても、所帯持ちの他市から本市への転入と定住促進の施策、これが鍵になってくるように思われます。もとより企業誘致も大切ですが、それだけでなく「職場は他市でも生活は山陽小野田市で」、こういう市民もたくさんいることを考えて、視野を拡げ、弾力的な思考で施策に取り組む必要を痛感しています。

対話の日

12 月 16 日(木) 19:00 ~  
中村自治会館